

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	言語学的説明再考：日本語の畳語を例として
Sub Title	The nature of linguistic explanation revisited
Author	唐須, 教光(Tosu, Norimitsu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.312(135)- 324(123)
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0324

言語学的説明再考——日本語の畳語を例として。

唐 須 教 光

1. 日本語における畳語。

Reduplicationは世界中の言語に見られる現象であり、英語のようにそれが少ないものもある反面、日本語のようにその多くが言語的特徴になっている言語もある。

日本語の場合特にオノマトペ的に使われる畳語は非常に多く、枚挙に暇が無い程である。しかし、すぐ分かるように、畳語にも幾つか種類があって、それらはその性格が必ずしも同じではない。いろいろな分類が考えられるし、実際に行なわれているが、ここでは分類が目的ではないので、次のような単純なもので十分である。

a) 体言として使われるもの。

例：人々、木々、島々、家々、等。

b) 形容詞として使われるもの。

例：物々しい、馴れ馴れしい、いまいましい、等。

c) 副詞として使われるもの。

例：寒々、常々、時々、内々、等。

この三つのグループを比べてみると、一つの重要な違いがあることに気付く。それは、a)の体言として使われるものに属する畳語が、極めて数が限られており、いわば閉じられた集合をなしているのに対して、b), c)に属する畳語は多数存在し、しかも、完全にではないにしても開かれた集合をなしているということである。⁽¹⁾

ここでは、体言として使われる畳語に焦点を当て、それらが何故閉じられた集合であるか、つまり、生産性が無いかということを考えてみるこ

にする。そうすることによって、その種の疊語の意味も明らかになってく
ると思われるからである。

換言すると、もし一般に言われているように、体言として使われる疊語
が単なる複数を表現するための手段であるとするなら、何故それらはもっ
と多くの語に適用されないのかという疑問が当然残るのである。例えば、
山々というのに何故丘々と言わないのか、人々というのに何故犬々と言え
ないのかという疑問である。

2. 体言を表わす疊語の非生産性。

さて、体言を表わす疊語を見てみると、いくつかの共通点があることに
気付く、まず第一は、音声の特徴であって、全てが二音節以下の語の反復
から成り立っているということである。形容詞として使われるb)類に属す
るものや、副詞として使われるc)類に属するものにも二音節の語から成り
立っているものが多いことも事実であるが、それでもオノマトペとして使
われるものの中には三音節以上のものから成り立っているものもあること
も事実である（例えば、ドスドスン、バタンバタン等）。

第二の特徴は意味的特徴で、これには二つあって、一つは、通常集団で
存在していると考えられているものを指示していること、もう一つは、
「人々」などに除いて、無生物であると言うことである。

第三の特徴は、語種的なもので、これらは全て和語であるということだ
る。⁽²⁾これから論じようということは、これら三つの特徴が、この体言と
して使われる疊語の非生産性に貢献しているということであり、従って、
それらの意味を考える上でも重要な役割を果しているということである。
このことを一つ一つみてゆきたい。

3. 和語の非生産性。

最近の語種論の研究によると、同種の語基との結合量という点からも、
又、異なる語種との結合量という点から考えても、漢語や外来語に比べて
和語は生産性が低いといわれている（例えば、野村雅昭1984参照）。このこ

とは、例えば、漢語同志の結合である、宇宙医学、地域研究、漢語と外来語の結合である、広角レンズ、ガラス繊維、システム工学、さらには外来語同志の結合であるイラストマップ、コインロッカーなどと比べて、和語同志の結合である共働き、抱きつきすり、和語と漢語の結びつきである、あおり行為、人工渚、などの例をみても直感的にも分かるであろう（例は主として野村1984による）。

さて問題は、何故和語は生産性が低いのかということが語種類では論じられていないことである。従来の言語学（国語学も含む）的説明はそのような「何故」を自らの守備範囲とは考えず、説明しようとしなかったと言ってよい。

しかし、本稿の目的の一つである体言として使用される畳語の非生産性を説明するためにはこれは重要なことなので、その何故を考えてみよう。

この問題を考えるにあたっては、二つの現象が重要である。一つは、外来語として日本語に定着したものは殆んど全て体言であるということである。ランニングとは言っても、ラン(run)とは言わないし、スウィミングとは言っても通常スィムとは言わないし、名詞としても動詞としても使われるような語、例えばkissという語が外来語として入って来る場合は「キス」という名詞が入ってきて、それを動詞として使うときは「キスする」と動詞化の語尾をつけるのが普通である。

しかし、もう一つ重要なことは、体言でも決して外来語として定着することがない種類の語が数多く存在することである。例えば、ドッグ(dog)、マン(man)、ツリー(tree)などは、英語の単語としては誰でも知っている語であるが、「私のドッグが」とか、「ウチのツリーは」などとは決して言わない。

ところが面白いことに、これらの語も、複合語になると外来語としての資格を容易に獲得するのである（例えば、ドッグフード、サラリーマン、クリスマスツリー等）。

この二つの現象は恐らく次のことを意味するのではないかと思われる。つまり、外来語を受け入れる事情は、一般的に言って、新しい物や慣

習、又は制度などが入ってきたり出来上ったりした時が主であるから、それらは必然的に抱摂関係の中の下位語的な位置を占める訳で、意味的にかなり制限を受けたものにならざるを得ないということである。フード（食べもの）は駄目だが、ドッグフードやキャットフードはフードの下位語であり、ペット食品が新しいものとして入ってきたときに用いられ始めた訳である。

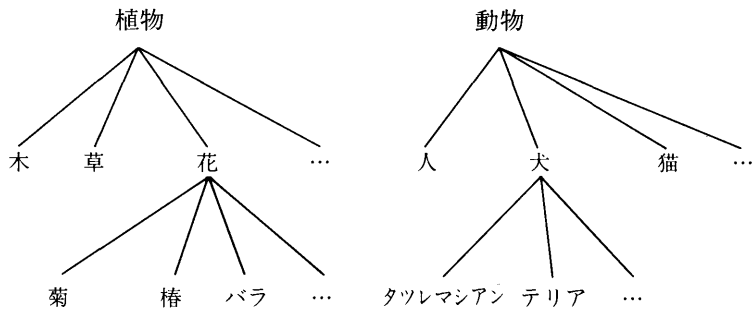
このことは、一見抱摂の階層体系の中で上位を占めるような語、例えば、クリーニング、スター、ボーイ、ボートなどが、原語の意味よりははるかに制限された（特殊化された）意味で使われていることを考えてみると一層納得がいくであろう。つまり、ボーイが「少年」一般に用いられることは決してなく、ウェイターという極く制限された意味にしか用いられないということである。

このことはある意味では当然の現象である。つまり、良く使われる基礎語彙に属するものは、物として新しく何かが出てくる割合は極めて低く、新しく出て来るものは、それら基礎語彙で表わされる「もの」の特殊なものであるからである。

さらにこのことは、上で述べたように、用言が外来語として定着することがないということと結びつく。新しい行為、様態が数多くでてくるといことは考えられないからであって、新しい事態は通常名詞に動詞化の接尾辞を付けて表わすことができるからである。（例えば、デートする、ダンスする等）。

4. 基礎水準カテゴリー。

さて、上では「抱摂関係の上位のもの」とか「下位のもの」という漠然とした言い方をしたが、より正確に言うと、それぞれの言語で基礎語彙かそれに近いもので表わされ、外来語にとって代られる確率が極めて低いレベルの語は、現在の認知意味論などで言うところの基礎水準カテゴリー（basic level category）⁽³⁾に属するものことである。つまり、このレベルに属する語は一般に、最も認知されやすく覚えやすい語であり、子



供の言語修得に際しても最初に覚えられるものと考えられているレベル
 なのである。⁽⁴⁾ 例えば上図の例では、それぞれの枝別れ図の中で、中間に位
 置するレベルが基礎水準カテゴリーに属するものと考えられる。つま
 り、2章で示したような、和語であり、二音節以下であるような語は全て
 このレベルにあるということがあり、偶然そのような条件を満たしてい
 る語があったとしても、そのレベルより下位のレベルに属する語であ
 れば、決して畳語としては使用されないということである。だからこそ、
 菊々、(花の名としての) パラバラなどと言わないのである。上の図など
 でも十分想像がつくように、その基礎水準レベル以上の語は漢語の複合語
 になる可能性が強く、基礎水準レベルより低い語には、犬の例で明きら
 かなように、外来語も現われてくる確率も高くなってくる。植物の場合
 でも、「木」より一つ下のレベルでは「松」「トチ」などが出てくるが、さ
 らにそれより下のレベルになると「赤松」「トド松」などの複合語が出現
 する可能性が極めて高い。

しかし、このように考えても、「犬」や「猫」のような動物が、基礎水準
 カテゴリーにある和語にもかかわらず「何故」畳語として用いられないか
 は「説明」することができない。つまり、「人を除いて他の動物は畳語には
 用いられない」というような記述的説明しかできないのであって、「何故、
 人を除く他の動物には用いられないのか」という説明は、以上のような考
 察では与えられないと言ってよい。

このことを別の角度から考える前に、これまで二音節以下ということ

しばしば言ってきたが「何故」二音節以下なのかということを考えてみよう。

5. 二音節以下であること。

一般に、音節の長さと言種の間には関係があるということは意味論の学者達によっても気付かれていた（例えばUllman, S. 1960）。例えば、少数の例外を除いて、英語においても外来語の方がアングロサクソン系の語よりも長い音節を持っているのが普通である。

アングロサクソン	外来語
begin	commence
food	nourishment
bodily	corporeal
buy	purchase
wire	telegram
bloody	sanguinary
rise	mount

などがそれをよく表わしている。またいわゆる four-letter words といわれるものも、音声上から言えば二音節以下である。そして、four-letter words は例外なくアングロサクソン系の言葉である。

さらにもう一つ別の種類の例を挙げるならば、他の言語と同様、英語に於てもいわゆる強変化動詞（不規則動詞）と呼ばれるものの殆んどは短音節である（例えば、最も強く変化する go-went-gone などがその代表例である）。

今まで述べてきたいくつかの異なった種類の例は、全て同一方向の傾向を指しているように思われる。つまり、言葉は使用頻度が高くなればなる程よりコード化し易くする必要があり、必然的に短音節化されるということである。従って、よく使われる動詞程強変化動詞である確立が高くなるという事は理にかなっている訳である。

又、強い感情的意味合いを持つ言葉が外来語ではなく土着の言葉であるこ

とは、アングロサクソンの場合も大和言葉も変わらない。そのことはいわゆるタブー表現に対する婉曲語法としてしばしば外来語が使用される例を見ても分かるであろう。

つまり、偶々短音節の語が基礎水準カテゴリーの語に多いというようなものではなく、音節の長さは語種や語の意味といわば有契的な関係を持っているとみなしてよいのである。

5. 信念体系。

さて、第4章の所で残しておいた問題に帰ろう。つまり、犬、猫等は、人と同じ基礎水準カテゴリーに属するのに、「人々」という表現に該当する「犬々」「猫々」にあたる表現がないのは何故かという問である。もし、体言の豊語が単に複数を表わしているとするならこれは納得がいかない現象である。

これに対する一つの答えは、2章で述べたように、豊語を形作する体言の特徴の一つとして、「通常集団として存在すると考えられるもの」という特徴を挙げることができるかもしれない。重要なことは、「通常集団で存在するもの」ではなく、「通常集団で存在すると考えられているもの」という点である。つまり、客観的に集団で存在するかどうかではなく、そう主観的に思われているかどうかという点である。もう一步進めて言うと、集団で存在することに意義を認めているかどうかと言っても良い。恐らく人は集団で存在するし、そうであることに意味があると考えられていたのに対し、犬や猫の場合は通常単独で存在すると見られていたし、たとえ、集団で存在したとしても、それに意味づけがなされることが無かったのではないだろうか。

この推論は検証される必要があるものであるが、ここでは一応それが妥当なものであると仮定しても、なお問題が残る。馬とか牛とか二音節で表わされる動詞で、通常集団で飼われていたと考えられるものがいくつもあるからである。これらはどう説明されたら良いのだろうか。

これに対する答えは、これも一つの仮説にしか過ぎないが次のような事

項が関係してくるのではないかと思われる。

体言としての疊語で表わされる物は、全て古代日本に於て何らかの信仰の対象になったものではないかということである。日本人の山岳信仰を初めとする自然への畏敬の念は良く知られるところであり、特に大きいもの、高いものへの畏怖の念は有名である。だからこそ、山々、峯々はもちろんのこと、岩々とも言うが決して石々と言ったり、丘々と言ったりできないのではないだろうか。さらに、家々、村々、町々のようにいわば人工物に対して疊語が使われることも今の説明の延長線上で考えることができる。家にはそれぞれ神棚があり、村や町には守護神社があるように、それらは神々の住まう所として意識されていたからである。人々や神々については言うまでもないであろう。

このように考えてくると、体言としての疊語は、同じ疊語といっても、形容詞や副詞としての疊語とかなり性質の異なったものだということが分かるであろう。つまり、体言としての疊語は非常に重要な基礎語彙のうちで、古代日本に於て何らかの信仰の対象となったもので、通常集団で存在する、あるいは、集団で存在することに意味がある、と考えられていたものなのである。そのようなものが次から次と新らしく出てくるはずがなく、これらが閉じられた集合な成しているのは当然なのである。

このことはさらに、それらの疊語が通常の意味での複数形ではないことを示唆している。すぐ想いつくように、これらの疊語として表わされている「複数形」は英語の“royal we”に似た機能を持っていて、いわば特別な意味合を持っていると思われるのである。つまり、“I”と言って自らを個別化するのを避けるために“we”が使われるように、ある種の信仰の対象としての体言の疊語は、明確な自己同定を避ける意味合いを持っていると考えられるのである。

このように考えてくると、第4節で論じた基礎水準以下の語で、二音節以下の和語の「菊」や「バラ」が何故疊語にならないかも説明できるのではないだろうか。つまり、「菊」「松」などは余りにも個別化されて輪郭がはっきりしすぎていて、語を重ねることによってむしろそれが強調される

という、畳語の持つもう一つの特徴が前面に出てくるからだと思われるからである。

7. 言語学的説明に向けて。

これまで主として、日本語のある種の畳語の非生産性がどのような条件に依存しているかということ述べてきたが、それによって筆者が示そうとしたことは、言語現象の説明が決して恣意的なものではなく、十分動機づけられたものであるということである。唯単にそうだからそうだというような従来行われてきた「説明」ではなく、人間の認知体系や信念体系に基づいて十分説明できるのだということである。

このような考え方の先がけになったのはボリンジャーの一連の研究であろう。彼のように「形式が異なれば意味も異なる」(cf Bolinger, D.1977)という前提に立てば、その形式の違いをもって意味の違いの動機づけができるからである。

例えば次の一対の文を見てみよう。

- (1) It seems that he is ill.
- (2) He seems to be ill.

これらの文は、(1)の文の従属節の中の主語のheが、(2)の文ではいわば格上げされて主節の主語になったもので、意味的には同じだとよく言われてきた。しかし、明らかにこの二つの文の間には微妙な意味の違いが読みとれるのであって、(1)の文は「体が病氣らしい」ということをどちらかという観客的に述べているのに対して、(2)の文ではもっと臨場感をもって「今見ている様子では」という意味合いがでているように思われる。

もう一つ別の似たような例を見てみよう。

- (3) John demanded Mary to leave.
- (4) Jone demanded that Mary leave.

この場合も事情は同じで、(3)の文方が(4)の文よりもずっと直接的で、JohnがMaryに直接命令しているという臨場感が出ているのに対して、(4)の方は、必ずしもJohnがMaryに直接口頭で命令しなくても、例えば、文

書で立退きを要求したというような解釈も許容すると思われる。これらの違いは、(3)に於いてはMaryがdemandという動詞の直接目的語になっているのに対して、(4)に於いてはMaryはthat節の中の主語として、(3)の文よりもより独立の度合いが高いことに由来すると考えられるのである。つまり、(4)の文ではJohnのMaryに対する行為が間接的になっていると言えるのである。

言語学は（広い意味での構造言語学は特にそうであるが）、従来このような違いを無視して、例えばそれらの文の関係を「変形」というような機械的な処理のし方で済ませようとしてきた。しかし、能動態の文と受動態の文がはっきりと違うように（例えば、どこに焦点が当たっているかという点で）、もし今までみてきたような文の差が無視されてきたら、つまり、形式が違って意味が同じなら、そもそも二つの異なる形式が存在する理がないのである。

このことは語のレベルではもっと以前から気付かれたことで、よく言われるように完全な同義語というのは殆ど全くといって良い程存在しない。（例えば、bigとlargeは同じように使える場面もあるが、big manとlarge manとは全然意味が異なるし、big brotherとは言えてもlarge brotherとは通常言えない）。ここでも、もし二つ（あるいはそれ以上の）語の意味が完全に同じ（つまり、あらゆるコンテストで交換可能）ならば、それらの存在意義が無いからである。もちろん外来語などの借入などによって、一時的には完全な同義語に近い形が存在することはあるかもしれないが、そのような場合、通常そのうちのどちらか一つが意味を変えるか、あるいは消滅してしまうということを史的意味論は教えてくれるのである。

このように考えてくると、言語は今まで考えられたように、徹底的に恣意的な体系にはなく、随所に動機づけが行われていることが分かる。もちろん、ある特定の動物を「犬」と呼ぶか「dog」と呼ぶか、あるいは「chicken」、「Hund」と呼ぶか等は言語分析のレベルでは恣意的であるであろう。しかし、それは言語の恣意性の（重要ではあるが）一部の例に過ぎ

ず、その他の例では多くの場合何らかの動機づけが行われている可能性があるのである。

もしこのような方向づけが正しいとするなら、言語学的説明の方向が必然的に変ってこずを得ず、今まで、「そうだからそうだ」式の「説明」しか与えられなかったものにも、もっと説明らしい説明が与えられるようになる可能性が十分ある。そして、そのような「説明らしい説明」はこれまでの畳語の説明でも明きらかなように、人間の認知的営みばかりではなく、信念体系といった文化の問題とも必然的に係わってくるのである。

考えてみれば当然のことであって、言語を自律的な記号体系とのみ見做している間は、言語現象の「説明」をしようとするれば、それはあたかも「血で血を洗う」ような結果にしかならないからである。血を洗うためにはそれとは異質の水を持ってこなくてはならないように、言語的現象を説明しようとするとは必然的に言語外の現象を持ってこようがないのである。

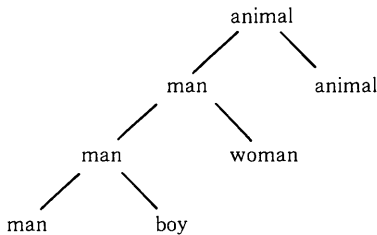
そして当然のことながらこのことの予想されるインパクトはかなり大きなものである。

例えば、いわゆるサピア・ウォーフの仮説と言われるものは、従来かなり漠然と述べられてきて、それ故言語学などではまともに扱われないという傾向にあったが、それにも従来よりずつと確かな基盤が与えられるようになることは容易に想像できる。

また、対照言語学的な考察は、従来、上に述べたような文の細かい差というものを無視して行われてきたため十分な成果を挙げてこなかった点があるが、テキスト言語学の発達などと共に、「動機づけ」の視点はこの分野にも大きく貢献すると思われる。

いずれにしても、言語学が理論的に武装するために余儀なくされた言語のオートノミーに言語研究を限定するという態度を再考して、もっと広く自由な立場から、他の学問的知見も考慮に入れて言語学的説明をし直す時期に我々はきていることは間違いなさそうである。

- (1) 英語にもこれに似た例があることは大変興味深い。英語においては、他動詞に接尾辞-ableをつけて can be X-ed (Xは当該の他動詞) を表わすことは非常に生産的な語形成であって、例えば、read→readable, fix→fixable, pay→payable, justify→justifiable 等といくらでも挙げることができ、仮に新しい他動詞が作られた場合、恐らく問題なく-ableをつけた形容詞が可能になるのであろう。それに対して、英語には名詞に-ableをつけて、他動詞に-ableをつけた語に意味的に似た語を形作るいくつかの例がある(例えば、reason→reasonable, fashion→fashionable, peace→peaceableなど)。これらは前の他動詞の例と違って極めて小数の閉じられた集会を形成する。
- (2) 漢語でも悠々、堂々、洋々などが存在するが、それらは全て副詞的に主として用いられるものであって、体言として用いられるものは無い。
- (3) この種の概念規定は Lakoff, G. の *Women, Fire, and, Dangerous Things* を参照。
- (4) 認知ということから、普遍的な傾向が予想されているかもしれないが、ここでもやはり言語間の差があり、それらは究極的には文化の問題に還元されるということがある。
- 例えば、次の階層関係を見てみよう。



この階層関係において、基礎水準カテゴリーは下から二書目のレヴェル、つまり man-woman のレヴェルであることは明らかである。もしそうでなかったら、-man のつく全ての語に反対して、chainman→chairperson, fireman→firefighter, mailman→maildeliverer のような言語改革が理解できない。何故なら、(われわれ外国人にとってそう思われるように、chairman の man が人を表すのであれば、当然女も含む訳であるからである。つまり、英語の原語者にとって、chairman, firman 等の man はあくまで「男」であって、決して「人」ではないということである。

- (5) Jespersen, O. *Monosyllabism in English*. In. *Selected Writing of Otto Jespersen*. 1928.
- Jespersen はここで主として、英語の単音節の語について述べているのであるが、基本的に同じことは多くの言語に当てはまると思われる。何故なら、

特定の言葉の使用頻度が高ければ高い程、それらの語は短くなる傾向があるのは殆どの言葉に共通するものであり、コミュニケーションの経済性の観点からも当然だからである。これはいわゆる codability の問題を考えればより一層明らかになるであろう。

参考文献 (引用文献)

Bolinger, D. *Meaning and Form*. London 1977

Jespersen, O. Monosyllabism in English. In. *Selected Writings of Otto Jespersen*.

Lakoff, G. *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago 1985

Ullman, S. *Semantics* Oxford. 1967

野村雅昭 「語種と遠語力」『日本語学』3巻9号 1984